

# 精神障害が登場する絵本の内容分析

## — 専門家による精神障害理解の教材としての絵本の評価 —

仲 本 美 央<sup>※1</sup> 藤 本 昌 樹<sup>※2</sup>  
若 林 ちひろ<sup>※3</sup> 有 馬 聡 子<sup>※4</sup>

### I. はじめに

患者調査（2008）によれば、精神疾患の患者数は年々増加傾向にあって、精神疾患により入院または外来治療を受けている者は約323万人となり10年前の同調査に比べて100万人以上の増加と言われている。その多くは、うつ病、統合失調症、不安障害等の患者であり、それらの患者の大半は在宅で闘病生活を送っている。このことにより、地域の中で精神障害のある人たちと共に生活する環境も増加していることが明らかである。そのような現状がある一方で、精神障害者に対する地域住民の理解の不十分さは未だ存在し、地域の人たちへの理解の啓発は必須であるとされている（小野田・長江，2011；吉田，2008）。2000年に厚生労働省の「社会的援護を要する人々に対する社会福祉のあり方に関する検討会」で、人々それぞれが社会の中で一員として包み支え合う社会となることを目標理念として提言された通り、精神障害者にとってもソーシャル・インクルーシブな社会への推進が求められているのである。

水野（2010）は、障害のある者もない者も生活する社会を形成するためには、幼児期からの障害理解指導が必要であると述べている。実際に、身体障害、知的障害、発達障害に関する幼児に対する障害理解指導の視点から、効果的な指導方法の一つとして絵本の読み聞かせがあることを言及し、それらの絵本の内容を分析し、障害理解指導に有効な教材となりうるかを判定している（水野，2002；水野・徳田，2002）。その他、絵本の読み聞かせによる障害理解指導にかかわらず、ふれあい体験や道徳教育などによる障害理解指導など、身体障害、知的障害、発達障害においてはこれまで多くの実践的指導や研究が取り組まれてきている。精神障害の理解指導においても、ボランティアやふれあい体験などの実践的指導や福祉

※1 総合福祉学部 准教授， ※2 静岡福祉大学 准教授，

※3 清和大学短期大学部 講師， ※4 まどか保育園 保育士

教育指導、ビデオ教材指導などによる取り組みは行われてきたが、中高校生以上の子どもを対象としたものに留まり、幼児や小学校までの児童に取り組みされる精神障害理解指導については、保育・教育現場において積極的に実践されていない現状にある。そのような中、近年、国内において子どもにも「こころの病気がわかる」ツールとしての絵本が作成され、近年増加している精神障害理解の一つとして販売されている。しかし、これら精神障害を対象とした絵本に関する内容分析やその活用による有効性についての研究は、未だ取り組まれていない。

そこで、本研究では、絵本が精神障害の理解指導において活用できるかどうかを明らかにすることを目的として、精神障害が登場する絵本の内容を分析することとする。また、内容を分析する上では、精神障害に対して専門的な知識を有する臨床心理士および精神保健福祉士、保育の専門知識を有する保育士と保育学研究者が分析することによって、その内容の適切性を評価し、検討していきたい。

## Ⅱ. 研究方法

### (1) 分析対象

2011年8月にインターネットによる大型書店で検索し、精神障害が登場していると思われる絵本を入手した。その結果、8冊入手でき、分析対象とした。この8冊は表1の通りである。8冊のうち、うつ病をテーマとした作品が3冊、強迫神経症をテーマとした作品が1冊、社交不安障害をテーマとした作品が1冊、統合失調症をテーマとした作品が1冊、摂食

表1：分析した絵本の一覧

	書名	障害内容	著者	出版社	発刊年
1	ひとりひとりの人 僕が撮った精神科病棟	さまざまな 精神障害	大西暢夫	精神看護出版	2004年
2	ぼくのなかの黒い犬	うつ病	マシュー・ジョンストン作・絵	メディア 総合研究所	2009年
3	わたしとあなたと、 黒い犬	うつ病	マシュー& エイズリー・ジョンストン作・絵	メディア 総合研究所	2010年
4	あさおきられないニワトリ	うつ病	宮田雄吾文・ほりえあつし絵	情報センター 出版局	2010年
5	てあらいがとまらない アライグマ	強迫性 神経障害	宮田雄吾文・霜田あゆ美絵	情報センター 出版局	2010年
6	さかながこわいクジラ	社交不安障害	宮田雄吾文・海谷泰水絵	情報センター 出版局	2010年
7	そらみみがきこえたひ	統合失調症	宮田雄吾文・北村友弘絵	情報センター 出版局	2010年
8	ふとるのがこわいチーター	摂食障害	宮田雄吾文・二見正直絵	情報センター 出版局	2010年

障害をテーマとした作品が1冊であった。全ての絵本には、絵本のストーリーとは別にそれぞれの障害や支援方法、障害者などに関する説明の文章が数ページ掲載されていたが、これらのページは内容分析の対象から除外した。

## (2) 分析および評価方法

大学教員で臨床心理士である者1名、大学教員で精神保健福祉士である者1名、保育者養成の大学教員で保育学研究者1名、保育士1名の計4名で絵本の内容分析とその評価を行い、評価一致度をK係数で示した。評価内容項目は、表2のとおりである。この項目は、水

表2：精神障害理解教材の適切性を検討するための内容

- 
- |    |                                       |
|----|---------------------------------------|
| A. | 障害を示す表現（言葉）                           |
|    | 1) 障害名、障害に関する事柄の名称の表示の有無および呼称がある      |
| B. | 障害の状態・特性についての説明                       |
|    | 1) 障害の状態・特性の説明がある                     |
|    | 2) 障害の状態・特性の説明に具体性がある                 |
|    | 3) 自分の心身の状態との違いを認識できる説明である            |
|    | 4) 適切な説明、ネガティブなイメージをもたせないように配慮がなされている |
| C. | 障害を示す挿絵                               |
|    | 1) 視覚的に障害があることがわかる挿絵である               |
|    | 2) 誤った描かれ方をしているものがある                  |
| D. | 障害者との接し方・マナー・配慮の説明の有無およびその内容          |
|    | 1) 障害者との接し方・マナー・配慮の説明がある              |
|    | 2) 上記の障害者との接し方・マナー・配慮の説明に具体性がある       |
|    | 3) 児童が実行できる内容が書かれている                  |
|    | 4) 適切な説明、ネガティブなイメージをもたせないように配慮がなされている |
| E. | 障害の原因についての説明                          |
|    | 1) 障害の原因の説明がある                        |
|    | 2) 上記の障害の原因の説明を児童が理解できる               |
|    | 3) 適切な説明、ネガティブなイメージをもたせないように配慮がなされている |
| F. | 障害者への専門的な治療（医師・カウンセラーなどの治療）に関する説明     |
|    | 1) 障害者への専門的な治療の説明がある                  |
|    | 2) 障害者への専門的な治療に関する説明に具体性がある           |
|    | 3) 児童が理解できる内容が書かれている                  |
|    | 4) 適切な説明、ネガティブなイメージをもたせないように配慮がなされている |
| G. | 障害者の治療回復後に関する説明                       |
|    | 1) 障害者の治療回復後に関する説明がある                 |
|    | 2) 障害者の治療回復後に関する説明に具体性がある             |
|    | 3) 児童が理解できる内容が書かれている                  |
|    | 4) 適切な説明、ネガティブなイメージをもたせないように配慮がなされている |
-

野 (2008) が障害理解教材の適切性を評価するために設定した項目に一部加筆修正したものである。それぞれの評価内容項目に対して「あてはまる」「どちらでもない」「あてはまらない」の三段階の評価を実施した。

さらに、幼児・児童への精神障害理解教材としての適切性に関して、評価者4名が8冊それぞれの絵本に対し、「幼児・児童の教材として適正がある」「幼児から低・中学年児童には難しいが高学年児童以降の教材としては適正がある」「幼児・児童の教材としては適していない」の三段階評価を行い、評価一致度をK係数で示した。

※K係数算出には、統計ソフトRのパッケージConcord (Lemon & Fellows, 2007) を使用し、CohenのK係数を算出した。

### Ⅲ. 結果と考察

#### (1) 絵本全8冊に対する評価と全体的な一致度

精神障害が登場する絵本全8冊に対し、精神障害を理解するための教材として、どれだけ適切性があるのかを検討するために、専門家4名がそれぞれの絵本について22項目の評価内容を評価し、その結果のK係数を求めた。専門家4名の全8冊の評価については、 $\kappa = .55$ という実質的には一致していないとみなされるK係数が確認された。さらに、これら4名の専門家をそれぞれの組み合わせによってK係数を求めたところ、3名の専門家による評価の組み合わせについては、臨床心理士・保育士・保育学研究者の評価で $\kappa = .63$ という実質的に一致しているとみなされる高いK係数が確認されたが、それ以外の組み合わせによるK係数は、 $\kappa = .40$ から $\kappa = .53$ という間の結果を示し、実質的には一致していないとみなされるK係数が確認された。また、2名の専門家による評価の組み合わせについては、臨床心理士と保育学研究者の評価で $\kappa = .62$ という実質的に一致しているとみなされる高いK係数が確認されたが、それ以外の組み合わせによるK係数は、 $\kappa = .04$ から $\kappa = .52$ という間の結果を示し、実質的には一致していないとみなされるK係数が確認された。

精神保健福祉士以外の3名の評価者の一致度が高い理由については、以下のことが挙げられる。臨床心理士・保育士・保育学研究者については、児童を対象とした職務または研究に従事しているという共通点がある。その結果、日常で子どもとともに絵本を手に取り、読む機会を有しているため、一般の数多くの絵本の質を捉える経験を持ち備える。臨床心理士・保育士・保育学研究者は「絵本でもさまざまな精神障害理解を示す説明においては、その障害に関する詳細かつ具体的な内容で述べられていることが重要である」との視点を置き、評価していた。その結果、実際に評価項目B～Gにおいては全体的に臨床心理士・保育士・保育学研究者は精神保健福祉士よりも厳しい評価結果が導き出されていた。

## (2) 絵本別の評価と全体的な一致度

専門家4名がそれぞれの絵本について22項目の評価内容を評価し、絵本別にその評価のK係数を求めた結果、『わたしとあなたと、黒い犬』については $\kappa = .69$ ,『てあらいがとまらないアライグマ』については $\kappa = .62$ という実質的に一致しているとみなされる高いK係数が確認されたが、その他6冊の絵本については $\kappa = .44$ から $\kappa = .58$ という間の結果を示し、実質的には一致していないとみなされるK係数が確認された。さらに、これら4名の専門家をそれぞれの組み合わせによってK係数を求めたところ、3名の専門家による評価の組み合わせについては、臨床心理士・保育士・保育学研究者の評価で、『ほくのなかの黒い犬』『わたしとあなたと黒い犬』『てあらいがとまらないアライグマ』『さかながこわいクジラ』は $\kappa = .64 \sim \kappa = .82$ という実質的に一致しているとみなされる高いK係数が確認されたが、それ以外の絵本についてのK係数は、 $\kappa = .57$ 以下の結果を示し、実質的には一致していないとみなされるK係数が確認された。また、精神保健福祉士・臨床心理士・保育学研究者の評価で、『ほくのなかの黒い犬』『わたしとあなたと黒い犬』『てあらいがとまらないアライグマ』は $\kappa = .62 \sim \kappa = .70$ という実質的に一致しているとみなされる高いK係数が確認されたが、それ以外の絵本についてのK係数は、 $\kappa = .57$ 以下の結果を示し、実質的には一致していないとみなされるK係数が確認された。2名の専門家の評価による評価の組み合わせについては、臨床心理士と保育学研究者の評価において『さかながこわいクジラ』は $\kappa = 1$ という全て一致しているとみなされるK係数が確認され、保育士と保育学研究者の評価においても $\kappa = .66$ という実質的に一致しているとみなされる高いK係数が確認された。その他精神保健福祉士と他の専門家との組み合わせによるK係数については、 $\kappa = .09$ から $\kappa = .25$ という間の結果を示し、実質的には一致していないとみなされるK係数が確認された。

それぞれの絵本の具体的な評価を見ると『ひとりひとりの人』は、専門家4名とも全体的に評価が低いものであった。その理由としては、精神障害の障害説明をする内容ではなく、精神障害者の生活を感じる手段として絵本の内容が展開していることや子どもを対象とした絵本ではないのではないかとそれぞれの専門家が判断したことが挙げられる。『ほくのなかの黒い犬』と『わたしとあなたと、黒い犬』は、障害の状態・特性についての特性の説明に具体性があったので、うつ病という障害のある者とその家族にとっての説明度の高い教材にはなりうるのではないかとということが専門家それぞれの共通評価であったが、障害の原因についての説明や治療回復後の説明は乏しかった。『あさおきられないにわとり』『さかながこわいクジラ』『そらみみがきこえたひ』『ふとるのがこわいチャーター』は、精神保健福祉士の評価と臨床心理士・保育士・保育学研究者の評価との違いがあり、後者3名の専門家においては、読み手が子どもであったとしても大人であったとしてもその説明に具体性がなく、挿絵・言葉・その他障害を示す表現に不適切な内容があるとの評価であった。

#### (4) 幼児・児童への精神障害理解の教材として適切性の評価と全体的な一致度

幼児・児童への精神障害理解教材としての適切性に関して、評価者4名が8冊それぞれの絵本に対し、「幼児・児童の教材として適正がある」「幼児から低・中学年児童には難しいが高学年児童以降の教材としては適正がある」「幼児・児童の教材としては適していない」の三段階評価を行った結果が表3のとおりである。その評価に対する一致度をK係数で求めた。専門家4名の全8冊の評価については、 $\kappa = .58$ という実質的には一致していないとみなされるK係数が確認された。さらに、これら4名の専門家をそれぞれの組み合わせによってK係数を求めたところ、3名の専門家による評価の組み合わせについては、臨床心理士・保育士・保育学研究者の評価は $\kappa = .91$ という実質的に一致しているとみなされる高いK係数が確認されたが、それ以外の組み合わせによるK係数は、 $\kappa = .45$ の結果を示し、実質的には一致していないとみなされるK係数が確認された。また、2名の専門家による評価の組み合わせについては、臨床心理士と保育士の評価について $\kappa = 1$ という全て一致しているとみなされるK係数が確認され、臨床心理士と保育学研究者および保育士と保育学研究者の評価においても $\kappa = .86$ という実質的に一致しているとみなされる高いK係数が確認された。その他精神保健福祉士と他の専門家との組み合わせによるK係数については、 $\kappa = .09$ から $\kappa = .25$ という間の結果を示し、実質的には一致していないとみなされるK係数が確認された。

評価者のうち、精神保健福祉士の評価のみ一致しなかった理由としては、以下の点が挙げられる。まず、第一にそれぞれの絵本を精神障害理解教材として評価する上で精神保健福祉士はある程度の障害を示す言葉や障害特性などを知る機会であることを前提として適性がある

表3：幼児・児童の精神障害理解教材としての評価

<評価者の評価基準>

A…幼児・児童の教材として適正がある

B…幼児から低・中学年児童には難しいが高学年児童以降の教材としては適正がある

C…幼児・児童の教材としては適していない

評価した本	精神保健福祉士	臨床心理士	保育士	保育学研究者
1. ひとりひとりの人 僕が撮った精神科病棟	C	B	B	C
2. ほくのなかの黒い犬	B	B	B	B
3. わたしとあなたと、黒い犬	B	B	B	B
4. おきられないニワトリ	A	C	C	C
5. てあらいがとまらないアライグマ	A	C	C	C
6. さかながこわいクジラ	A	C	C	C
7. そらみみがきこえたひ	A	C	C	C
8. ふとるのがこわいチーター	A	C	C	C

るかどうかを大きな評価基準としていた。このため、平易な言葉と表現で障害の特徴を捉えることが可能であるならば、幼児・児童が理解できる程度の内容であればA評価と高い評価を定めていた。反対に、評価一致度の高い臨床心理士と保育士と保育学研究者においては、幼児・児童への精神障害理解教材であるならば動物等での擬人化した表現ではなく、精神障害者そのものの姿で障害を示す表現やその他の説明が必要であり、障害の原因や専門的な治療および回復後の状況もあいまいに捉えることになってしまうとの理由から動物によって表現された4～8の絵本についてはC評価という低い評価を定めていた。また、児童を対象とする精神障害理解教材とするならば、さらに具体的な説明を絵本の内容に含ませ、精神障害者の心情面・行動面への理解をはかることが必要であるとの理由から低い評価を定めていた。

#### IV. まとめ

本研究では、4名の専門家による絵本の評価を実施することにより、それぞれの立場から精神障害をテーマとする絵本を分析する視点の相違点があることが明らかとなった。

それぞれの専門家の内容分析および評価の違いから、絵本の作成上、以下の2点の配慮が必要である。まず1点目は、研究対象となった絵本が読み手にとって精神障害を理解する教材とすることを目的として作成されたものではないものも含まれている可能性があるものの、読み手が子どもからを対象とする絵本とするならば、作成者が精神障害を説明するためのみに絵本を作成する視点だけではなく、子どもが絵本を理解していく過程や対象とする読み手の年齢に応じた配慮のある絵本内容を検討した上で作成することが必要であると考え。さらに、2点目として精神障害の理解の教材として絵本を活用することが前提ならば、このような内容検討を行い、絵本を作成することは重要であると考え。その重要性を唱える上でも、本研究で行った専門家それぞれの立場からの評価視点だけでなく、今後は、本研究では取り上げることができなかった評価項目別での分析結果から、より詳細な専門家による絵本の評価内容とその結果による精神障害を理解する教材の必要性について考察していきたい。

#### 引用文献

- Lemon, J., Fellows, I. (2007) Package 'concord' <http://cran.r-project.org/web/packages/concord/concord.pdf>
- 水野智美 (2010) 発達障害が登場する絵本の内容分析—幼児に対する障害理解指導の視点から—, 障害理解研究12, 9-18.
- 水野智美 (2002) 幼児に対する福祉教育教材としての絵本の内容分析—絵本のストーリーを中心に—, 読書科学, 46 (3), 89-97.
- 水野智美・徳田克己 (2002) 幼児における絵本を用いた障害理解指導の効果—車いすの子どもが登場する絵本を用いて—, 読書科学, 46 (4), 147-155.
- 小野田咲・長江美代子 (2011) 精神障がい者が継続して地域で生活するための支援活動の現状と課題, 日本赤十字豊田看護大学紀要, 6 (1), 21-30.
- 吉田久美子 (2008) 地域で暮らすということ, 病院・地域精神医学, 51 (1), 20-21.

## The Presentation and Treatment of Psychiatric Disabilities: Evaluation of Picture Books by Experts for Use as Educational Material for Understanding Mental Disorders

NAKAMOTO, Mio  
FUJIMOTO, Masaki  
WAKABAYASHI, Chihiro  
ARIMA, Satoko

In order to shed light on whether picture books can be used for providing guidance to develop the understanding about mental disorders, the present study analyzed the contents of picture books where various mental disorders are appearing in the books. Moreover, the contents were analyzed by clinical psychotherapist and mental health welfare professional equipped with the expert knowledge of mental disorders, and child care worker and child care science researcher having the expertise of child care, so that the appropriateness of contents can be evaluated and reviewed. As a result, it came to light that there were differences in the standpoints of each of the four experts. Moreover, from the evaluation results of contents analyzed by the respective experts, it can be concluded that though the picture books covered in the present study were not prepared for understanding the mental disorders, if the targeted readers of picture books are children to adults, author should not create the picture book from the standpoint of understanding mental disorders, rather it is necessary that they create the picture book according to the extent of development and course of understanding the picture books.